

からこかぎ

第21号 平成30年2月13日(火)発行

唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会

〒636-0247 奈良県磯城郡田原本町阪手233-1 唐古・鍵考古学ミュージアム内

TEL 090-9257-3688 Email: karakokagijimukyoku@swan.ocn.ne.jp

吉備バス旅行のご案内（訪問遺跡編）

1 吉備

(1) 吉備の地形

古代は岡山県全域から広島県東部（備後）を「吉備」と呼ばれていましたが、弥生時代は吉井川と・高梁川にはさまれた範囲を指します。中国山地に源流をもつ県内三大河川の吉井・旭川・高梁川が北から南に流れ、河川が大量の土砂を山地から運び、この土砂の堆積により岡山県南部に沖積平野（扇状地・扇状地端部・三角州など）が形成され、弥生遺跡が営まれました。

(2) 行程

今回は、**旭川東岸・西岸の遺跡**を訪れます。前半は、旭川西岸の津島遺跡、東岸の百間川原尾島遺跡とその周辺遺跡を訪れ、後半は高梁川から分流している足守川の下流～上流の弥生遺跡を順次めぐります。途中、「岡山大学考古資料館」と「遺跡&スポーツミュージアム」そして「古代吉備文化財センター」に立ち寄り、吉備を代表する弥生期の展示遺物を確認します。

以下、行程に沿っていくつかの遺跡ポイントを紹介します。

（注：太字遺跡は、バス下車と車窓で確認する遺跡を含みます。）

2 津島遺跡～稲作を中心とした生産力の高まり

前期の住居遺構や水田祉が検出された**津島遺跡**を訪れます。北東から南西にのびる微高地上に形成された遺跡ですが、隣接する**朝寝鼻貝塚**から縄文期の地層からイネのプラントオパールが検出され、近接する**津島江道遺跡**、**津島岡大遺跡**そして**北方下沼・横田・中溝・地藏遺跡**からも前期の水田祉が検出されています。また、後期には、集落域が拡大し、集落遺構が多く検出されているエリアです。（上

写真：北方横田遺跡の前期水田址。左手奥に津島遺跡内のスタジアムの照明灯）

3 百間川遺跡群～初期環濠集落とテクノポリス

百間川は、旭川の改修工事に伴い河川敷から遺跡が発見されました。上流側から**百間川原尾島遺跡**・**沢田遺跡**・**兼基遺跡**・**今谷遺跡**・**米田遺跡**があり、操山の麓の微高地上に位置します。百間川沢田遺跡は、前期



中頃の環濠集落で、初期環濠の特徴を有しています。百間川原尾島遺跡からは、前期の水田社も検出されますが、後期になると沢田遺跡にかけての3kmにかけ面積7.8haの水田が確認されました。また、百間川原尾島遺跡を中心として遺跡群からは土器の焼成土坑や製塩炉そして鉄器製作時の破片や素材と想定される棒状の鉄片が出土しています。また、朱を精製するための石杵や鍋やガラス滓なども多く出土し、後期には先端技術が集約されたエリアです。出土遺物は、**古代吉備文化財センター**に展示されています。(前頁写真：百間川原尾島遺跡の後期の集落址(上部)と水路を挟んで水田社)

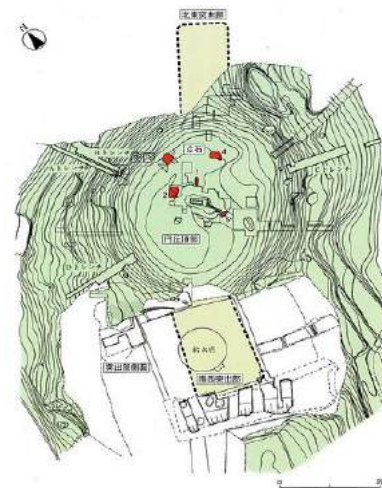
4 南方遺跡群～中期以降の集落域の拡大

南方遺跡は、前期の環濠と想定される弧状の溝3条が検出されていますが遺構密度は少なく、中期になると住居や土坑などの集落遺構や土壙墓・木棺墓が密集状態で検出される大規模集落となっています。しかし、中期後葉には、隣接する**絵図遺跡**、**上伊福遺跡**からは濃厚な集落遺構が検出され、さらに後期には津島遺跡周辺さらには後期後半には**伊福定国遺跡**へと移動します。一方、中期後葉からは、南の海浜部に近い**鹿田遺跡**や**天瀬遺跡**で濃厚な集落遺構が見られます。車窓からですが、旭川西岸の集落動向を確認できるエリアです。(写真：南方遺跡出土の高床建物が描かれた分銅形土製品)



5 上東遺跡～吉備の玄関口

別項で**上東遺跡**は紹介されていますので、ご参照ください。ここでは、上東遺跡から南北方向直線で当時の海を挟んで3kmの距離にある早島丘陵の東端の**奥坂遺跡**を遠望します。同時期の遺跡に加え、位置関係から監視機能を担った高地性集落と考えられています。



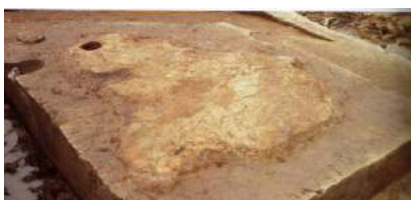
6 楯築弥生墳丘墓～古墳移行期の墳墓群

弥生後期後半の築造の**楯築弥生墳丘墓**ですが、その特徴である双方中円形の墳丘や墳頂の立石や円礫帯などを確認します。あわせて、周辺の**鯉喰神社弥生墳丘墓**、**女男岩弥生墳丘墓**、**雲山鳥打弥生墳丘墓**、**辻山田遺跡**そして対岸にある**矢藤治山弥生墳丘墓**を遠望します。

最初に訪れる**岡山大学考古資料館**で、楯築弥生墳丘墓の副葬品や特殊器台・特殊壺、伝世弧帯文石などを見学します。(上図：楯築弥生墳丘墓の墳丘測量図)

7 津寺遺跡～足守川流域の集落

津寺遺跡は、弥生時代後半から古墳時代初期の大規模集落で、終末期には竪穴住居が300棟に達しその中には柵列に囲まれた独立棟持柱の大型建物も検出されています。遺跡からは他地域からの搬入土器も多量に出土し遠隔地との活発な交流が窺えます。また、遺跡中心部からは鉄滓などが出土し鉄器の生産が推定されています。同一微高地上には、**津寺一**



軒屋遺跡、津寺三本木遺跡があり、津寺一軒屋遺跡からは、後期後半の鍛冶炉が検出されています。津寺遺跡の下流域には、足守川加茂A遺跡、足守川加茂B遺跡、足守川矢部南向遺跡、加茂政所遺跡があり、後期からの集落遺構がみられ終末期に活発化します。水銀朱・ベンガラの生産や小型品の青銅器生産がおこなわれていたことがその出土遺物から推測されています。楯築墳丘墓の被葬者との関連が論議されているエリアでもあります。(前頁写真：津寺一軒屋遺跡の考古後半の鍛冶炉跡)

8 高塚遺跡～青銅器を介した地域間交流

高塚遺跡は、他の足守川流域の集落遺跡と同じく後期後葉から終末期にピークを迎えます。検出された遺構は、多くの堅穴住居・掘立柱建物や方形周溝墓などですが、注目されるのは、突線流水文銅鐸(突線鈕Ⅱ式) や25枚の貨泉や素材と想定される棒状銅製品 や銅鏃未製品です。他地域の搬入品と想定される異系統の銅鏃も出土し、青銅器を介した地域間交流が想定されます。

(写真：高塚遺跡の棒状銅製品と貨泉)



遺跡紹介 上東遺跡—吉備の穴海の玄関口

弥生ウォーク世話人グループ

今回は、岡山県南部の倉敷市上東遺跡(以下、遺跡という。)を報告いたします。吉備高原に水源をもつ足守川の下流域には沖積平野が広がり、上東遺跡をはじめ多くの弥生遺跡が分布しています。これらは、北方の中国山地から河川が運んだ土砂の堆積によって平野部が拡大したもので、遺跡は中期後葉から集落が形成され後期中葉に盛期を向かえ古墳時代前期後葉まで存続しています。遺跡範囲は、推定50ha以上とされ、遺跡内を山陽新幹線(岡山→新倉敷の最初のトンネル手前付近)が通ります。

1 遺跡の標高

1971年の第1次調査で複数の旧河道と4箇所の微高地(堅穴住居や井戸など濃厚な集落域・墓域)が特定され、海拔1.5m程度と報告されています。一方1997年に実施された第3次調査で検出された波止場状遺構は海拔0mです。従って、遺跡南端は旧海岸線(現在は15km南)にあたり、土坑内の貝層の分析からはヤマトシジミやカワアイガイなどの汽水性の貝類が8割を占めているとのことで、遺跡は河口付近にあり、旧足守川の東岸(西岸は50m離れた川入遺跡付近)にあったことがわかります。



2 波止場遺構

第3次調査(山陽新幹線の南側10m、南北方向延長800mの調査区)からは、北東から南西にむけて、幅5~14m、長さ45m、高さ2mを超える規模の突堤状の高まり(波止場状遺構)が検出されました。報告書による

と、礫石が盛土の上に貼り付けられ、縁辺には崩落防止の杭が打たれています。築造には、切り取った葦や木の枝を敷き込む「敷葉工法」がなされ、中期前葉の長崎県壱岐の「原の辻遺跡」（特別史跡）の船着場と同様の技術が使われていました。出土土器より弥生後期後半から古墳時代前半まで機能していたとされています。

波止場状遺構は、網の目状に広がっている自然水路を利用した吉備地域の各集落間の物流ネットワークの集約場所として、さらには他地域との交易・交流の拠点として活用されたものと思われます。遺跡からは、国内各地の土器に加え楽浪系の円筒型土器や朝鮮半島の三韓系土器も出土し、広範囲の交流があったことを裏付けています。（前頁写真：上東遺跡の波止場状遺跡と多数の土器）

3 絵画土器

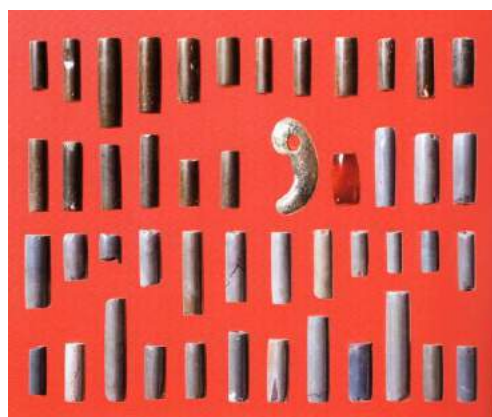
波止場状遺構の裾部や深みの底から 1000 個以上の完形やそれに近い土器が出土し、航海の安全を願う祭祀に使用されたと解されています。その中に、口径 8cm・高さ 6.6cm の完形の精製小型鉢が出土しています。口縁の一部の内外 2 箇所には鋸歯文風の文様が描かれ、鉢の体部外面には、4つの絵が描かれています。絵柄は、①から④が描かれ、①人物（祭祀者が）②龍（神に祈り）③動物の顔（災いを招く悪霊を取り除き）④カマキリ（豊穡と多産の幸せの願い）を祈るといった船出に向けた祈り（祭祀行為）を表していると解釈されています。波止場状遺構からは、使用痕跡のあるト骨や鋭利に磨き上げられた骨鏃や未使用の製塩土器さらには弧帯文土器など祭祀に関連されたと考えられる遺物も多く出土しています。



（写真：上東遺跡の絵画土器、②③④に抽象化（記号化）がみられる弥生後期の土器）

4 楯築墳丘墓の副葬品

後期後半から終末期の吉備社会の交易品は、サヌカイトなどの石材や青銅・鉄器・朱・ガラスの原材料や銅鏡・貨泉などの特殊遺物の搬入と、吉備地域からは米や塩などの集落内の余剰品や分業化が進行した集落の手工業製品（土器・石器・木製品・ガラス製品・金属製品）などが波止場状遺構から積み出されたと考えられます。



ここでは、楯築墳丘墓の副葬品に着目します。木棺の中には、着装されたヒスイの勾玉(1)・メノウ製ナツメ玉(1)・碧玉製管玉(27)の首飾り、遺体上体右側に鉄剣1本（切っ先を足元）、数百に及ぶ碧玉の管玉とガラス制丸玉や小玉多数からなる一連の玉類が置かれ、棺外からは碧玉の管玉(18)が副葬されていました。原材料を含め搬入品ですので、波止場状遺構を経由して運び込まれたものと思われ、遺跡は楯築墳丘墓に表れる吉備の首長の形成に大きく関わったことがわかります。なお、楯築墳丘墓の副葬品は、「岡山大学考古学資料館」に収蔵されています。

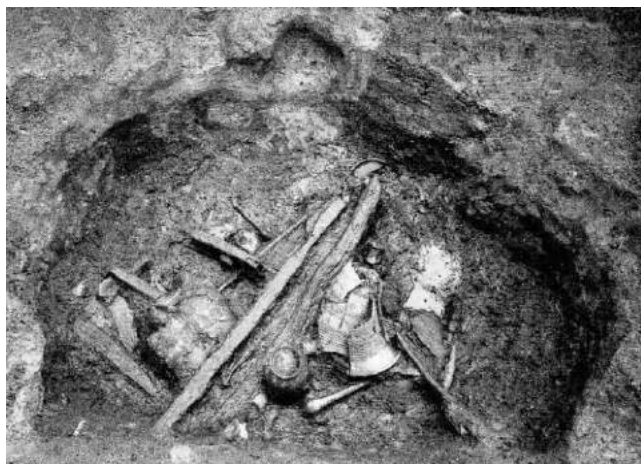
（写真：楯築墳丘墓の主体部の玉類）

遺物紹介 ー大型器台 ー吉備からの搬入品

会報編集メンバー

(1) 出土

今回は、平成4年に実施された第51次調査で出土した「大型器台」を紹介します。改装前の唐古・鍵考古学ミュージアム第1室「交流と戦い」のコーナーに展示されていた遺物です。大型器台は、ミュージアムコレクション39や唐古・鍵遺跡考古資料目録Ⅱ（P58）などに紹介されています。第51次調査は、唐古池の南側堤防内部の擁壁工事に伴う調査で、第1次調査（報告書：彌生式遺跡研究）で検出された唐古池南方砂層南側に近接しています。狭い範囲の調査区（50㎡）ですが、前期（土坑・落込み）、前期末か中期初頭（柱穴群・小溝）、中期（大溝・橋脚状木杭・小溝・井戸・土坑）、後期（井戸）の遺構が検出され、中期を中心に前期からの集落活動が認められます。後期は、遺構は、調査地中央の井戸（SK-104）1基のみで、その時期の活発な集落活動の痕跡はみえませんが、大型器台は井戸の下層から出土しました。井戸は、楕円形で長軸2.9m、短軸推定2.4m深さ1.6mで、



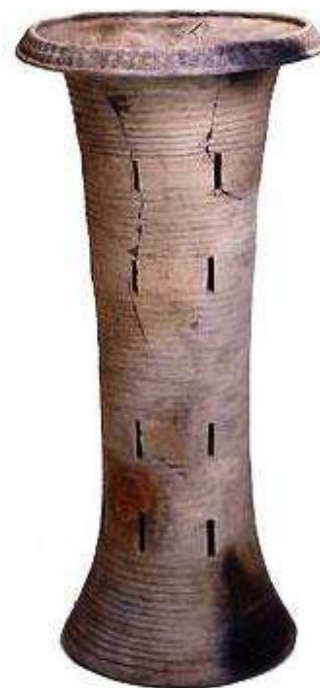
多くの土器や楯などの木製品、骨角器、ヒョウタン・クルミなどの種子類など多様な遺物が出土しています。報告書では、共伴土器を根拠に、後期初頭の大型器台としています。

（左写真：井戸（SK-104）の出土状況。報告書）

(2) 形状

器台は、壺や皿など器台を載せる土器とされ、壺と比較し出土量が少なく装飾性が高いので祭祀などに使用されたと考えられています。

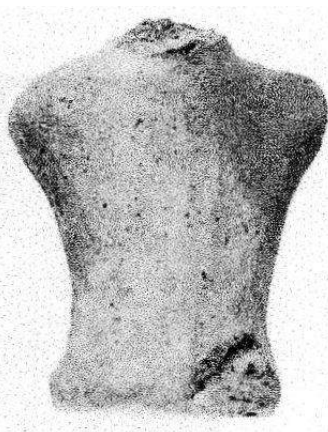
初源は北部九州ですが、中期中頃になると西日本一帯に広がります。器台は、比較的長めで細身ですが、後期になると、数は少ないのですが、上部と裾の間が長い筒状になり大型化した器台（筒形器台）が出現し、重量感も増し、全体に文様が描かれ、方形などの透かし孔もみられるようになります。大型の筒形器台の分布は、播磨・伊予・周防・豊後地方にもみられ、摂津（高槻市古曾部・芝谷遺跡1基）や河内（八尾市中田遺跡第17次調査で3基）が注目されます。大型の筒形器台の中には、胴部が短く鼓状の器台が多くみられ、さらに突帯（タガ）状の隆起帯が有り、展示品とは形状が異なるものもあります。一方、後期後半になると、吉備では、器台は特殊器台に発展し古墳期の円筒埴輪の祖形となります。



普通器台は、通常 20～40cm 程度の高さですが、展示遺物は高さ 73.4cm もあり、吉備の特殊器台に相当する高さです。また、重さ 9.5kg もあり、重量感があります。中央がややしまった円筒部には 5 段構成の多条の凹線文と特殊器台にみられる長方形の透孔が 4 段 6 方にあります。口径は 39.6cm と大型です。外半する口縁部には装飾文様（端面に凹線文、その上に竹管文をへら描きで繋ぎ連続渦文 2 段）が巡らされています。因みに、近藤義郎先生は、大型の筒形器台は、特殊器台に先行するとし、唐古・鍵遺跡の大型器台は、後期初頭の上東式長頸壺の出現前とされています。（前頁写真：展示遺物。ミュージアムコレクションより）

(3) 特殊器台

吉備の特殊器台は、弥生墳丘墓（地域の首長墓）の埋葬祭祀に使用され、楯築墳丘墓が初源といわれています。その特徴は、①器高（70・80cm 程、1m 越を含む）②器体胴部（文様帯と間帯で構成し、文様帯には弧帯文など特殊な文様）③内面（薄くへらケズリ）④外面（赤色顔料で丁寧な製作）といわれています。（右写真：楯築墳丘墓の特殊器台）



器台と特殊器台の分類は、その形態、大きさ、文様そして胎土に着目されています。展示遺物は、形態は、特殊器台に類似するのですが、円筒部には、突帯（タガ）状の隆起帯がなく、上・下端部の外反も少なく相違点も見受けられます。また、色相も顔料の塗布もなく黒雲母・角閃石質を含んだ特殊器台の特有の褐色ではありません。しかし、灰白色といった花崗岩質を含んだ吉備の土器の特徴を持っている点が注目されます。

(4) 祭祀遺物

井戸からは、吉備に多くみられるト骨や刻み鹿角などの祭祀遺物が出土しています。また、報告書では中期の大溝（SD-103）とされていますが、吉備の祭祀遺構にみられる人形土製品やト骨や骨鏃などが出土しています。第 51 次は狭い調査面積ですが、大型器台をはじめ吉備に関連する祭祀遺物が多く出土することから、弥生後期後半の吉備との関わりに注目したいエリアです。井戸（SK-104）は、その当時の祭祀遺物の廃棄土坑とも考えられます。（上写真：SD-103 から出土した人形土製品。報告書より）

祝
唐古・鍵遺跡史跡公園
開 園

平成 30 年 4 月 17 日（火）

平成 30 年度定期総会

- 平成 30 年 4 月 14 日 11 時から 11 時 30 分
- 青垣生涯学習センターボランティア室
- 詳細は、後日ご連絡いたします。

弥生ウォーク 「十六面・薬王寺遺跡と周辺遺跡」に参加して

宮川 真由美

1 はじめに

今回は、唐古・鍵遺跡の「衛星集落」といわれている遺跡を訪れました。以前に弥生ウォークで行った遺跡もありましたが、会報に掲載された事前案内では、「弥生終末期」に着目したコース選定とのことで興味がありました。特に、前々回のウォーク（安堵町黒石10号墓）で紹介された十六面・薬王寺遺跡の円形周溝墓を楽しみにしていました。

2 出屋敷遺跡からスタート

集合場所の近鉄線結崎駅は、出屋敷遺跡の中に含まれていました。遺跡からは、弥生前期中葉（土坑・井戸の集落遺構と土器・木製梯子の遺物）と後期後半から終末期・古墳期初頭の土坑や東海系土器を含む多くの土器が出土していました。出屋敷遺跡そばの公園で、箸中山古墳（箸墓古墳）築造の時期を画期として、弥生終末期は、それ以前の2世紀末から3世紀半ばを指し、庄内式期はその範疇に含まれるとの時代区分（時間軸）の説明がありました。



そこでは、さらに、今回訪問する弥生遺跡の全体図の説明がありました。北西方向に全ての遺跡が直線状に分布していて、旧流路が形成した自然堤防上の微高地に弥生集落が形成されていることが分かりました。訪問する全ての遺跡からは、旧流路が検出されているとのことで地勢的にも裏づけられていました。そして、共通する点は、中期には集落活動が希薄で、後期後半以降弥生終末期に盛期を迎えるということでした。また、出屋敷遺跡と同様に弥生前期の活動痕跡があるとのことで、微高地の形成が、弥生前期以前であったと思いました。

3 墓域をみる

次に訪れた旧石器の遺物も出土している庵治（おうじ）遺跡では、中期前葉の方形周溝墓が同時存在ではないのですが6基検出されていて、その時期の方形周溝墓の存在が不明確な唐古・鍵遺跡と異なり弥生墓制が確認できました。これは、次に訪れた三河遺跡（三河東遺跡と同一墓域）や伴堂東遺跡と同様でした。縄文時代から継続する墓制（土壇墓や土器棺墓）と異なった方形周溝墓が、弥生前期後半から中期前葉に形成されていて、このエリアは弥生化の進行が早かったと感じました。そこで、平成26年の第12回弥生ウォークで訪問した八条北遺跡（弥生前期後半を含む中期を中心にした100基近い方形周溝墓群が検出された遺跡）が北方向の近距離にあることに気がつきました。八条北遺跡も、縄文晩期にはじまり、弥生前期から中期に盛期がありましたので、交流の可能性があったと思います。

また、午前中に訪れた庵治遺跡・三河遺跡、三河東遺跡、伴堂東遺跡の墓域のいずれもが、後期後半から終末期に土坑や溝、堅穴住居状遺構などが検出されていました。墓域とは違った集落活動が認められるので、その時期には共通して墓域から集落域へと土地利用が変わったことが分かりました。

3 唐古・鍵遺跡とのちがいをみる

黒田遺跡での昼食後、終末期の唐古・鍵遺跡の説明がありました。当日に配布された資料には、庄内・布留期の唐古・鍵遺跡を調査地毎に紹介がされていて、それを基に説明がありました。そこでは、唐古・鍵遺跡の弥生終末期の環濠の消長と集落遺構の分布という2点に焦点があてられました。前者は規模が縮小し環濠という規模でなく住居の排水溝に相当する程度で、後者は集落も東エリアや西・南エリアに僅かに点在するのみで、唐古・鍵遺跡の衰退（期）という内容でした。

また、今回の探訪遺跡はいずれも小規模の集落ですが、近畿地方の弥生後期から終末期に共通する「大規模集落が衰退し、小丘陵を中心に小規模集落が活発化する」現象と同じと説明がありました。確かに、第13回弥生ウォークで訪れた富雄川流域の遺跡は、丘陵の麓の緩傾斜地（比高差10～20m）に位置し弥生中期から後晩期を中心とした小規模集落でした。また、平成28年度に数回訪れた生駒山西麓の小丘陵に点在していた後期の小規模集落も同じだと思いました。

4 宮古北遺跡をみる

昼食後、曇り空になり風も強くなり寒くなりましたので、十六面・薬王寺遺跡と近接する宮古北遺跡、保津・宮古遺跡、羽子田遺跡は早足となり、行きたかった十六面・薬王寺遺跡の円形周溝墓も遠望ということになりました。

午後最初に訪れた宮古北遺跡は、前期からの遺構・遺物はわずかで、後期後半からは土坑・ピット・小溝などの集落遺構が検出され、午前中の遺跡と同様の傾向を示していました。また、十六面・薬王寺遺跡や保津・宮古遺跡や羽子田遺跡も同じでした。いずれの遺跡からも網の目状の旧流路が検出され、集落内には墓域も形成されていました。但し、周溝墓などのお墓の位置ですが、十六面・薬王寺遺跡の円形周溝墓も含め集落の活動域とは明らかに距離がありました。奈良盆地内の縄文晩期から弥生時代を通じて堅穴住居などの住居と土壇墓などのお墓が近接している特徴とは、明らかに違いがありました。後期後半の畿内では、集落と墓域の距離があって小丘陵など少し高いほうに移動する傾向にあるとの話しを思い出しました。午後に確認できた墓域は、いずれも集落より上流（高い位置）にありました。

5 他地域との交流

今回は、終末期の唐古・鍵遺跡周辺の小規模集落の動向を確認できました。この時期は、畿内各地の拠点集落は衰退し、その周辺に小規模の集落が数多くみられるとされていましたが、唐古・鍵遺跡の周辺遺跡も同様の推移を示していると思いました。その原因について、冷涼化や人口の増加などを想定することが可能ですが、未だ確たる意見はみつかっていません。

しかし、今回訪れた終末期の遺跡からは、搬入土器が出土していて、伴堂東遺跡では、東海系土器や吉備系土器が高い割合を示していました。確かなことは、その時期は他地域との交流が活発化し、その動向が唐古・鍵遺跡を含め周辺集落に及んでいたであろうことがわかります。当然、古墳前期にみられる新たな祭祀行為や農業技術さらには鉄製品の搬入などが予想されます。

次回のバス旅行は、「吉備」とのことで、他地域の影響など今回訪れた弥生終末期の小規模集落動向を考えながら楽しみたいと思います。

（編集委員）

東 治雄 井上知章 植田洋高 大森初美
谷口敬子 花坂志郎 福島道昭 藤原隆雄
万徳順一 宮川真由美